

「抱きしめる」ことが親の子に対する イメージに与える影響に関する研究（2）

今川 真治 山元 隆春 財満由美子 林 よし恵
上松由美子 松本 信吾 松浦あずさ

1. 研究の目的

ヒトの母子関係の実証的研究を行ったエインズワース (Ainsworth, 1978) が、親子の愛着形成に最も重要なのは身体接触であることを指摘したように、われわれヒトの親と子の間で交わされる相互交渉のうち、特に身体接触は、親子の絆を深め、親と子の相互が愛着を形成していく上で重要な役割を持つ。中でも「抱きしめる」という行為は、親にとって子どもへの愛情を表現するための行為として最も行いやすく、同時に子どもにとっても親からの愛情を実感しやすいため、親からの抱きしめが愛情表現として果たす役割は大きい。

子どもは2～3歳頃から急速に自我が発達しはじめ、自己主張の一環として親を困らせるような行動をとったり、わがままを言い始める。そのため、3歳児においては、他者とのいざこざがもっとも多く発生するという報告もある (Green, 1993)。3歳頃は、様々なことを自分でやってみたいと思う時期である一方で、まだ親からの精神的自立が十分ではなく、親への甘えも強いために、親との近接や身体接触を強く望むと考えられる。無藤 (1997) も、この時期の子どもの対人行動の発達について、3歳児は他者とことばだけでやり取りすることは少なく、身体がことばの代わりや補足として機能していることを指摘している。

近年では多くの子どもたちが3年保育のために3歳から幼稚園に通っているが、幼稚園生活においては、それまで大人との関係を中心に生活してきた彼らが、初めて家庭外で同年齢の多数の子どもたちと社会的な関係を持ち、仲間関係の基礎を形成していかなければならない。つまり、彼らの家庭と親子関係に目を向ければ、この時期は、子どもにとっては親離れ、親にとっては子離れの第一歩となる重要な時期であると言える。

4歳頃になると、児の自己主張が幼児期において最

も高まるが、まだ自己抑制の能力が十分に発達していないために、仲間やきょうだいとのケンカが多く見られる (柏木, 1983)。その一方で、友だちと一緒に遊びを楽しむことを知り始めるため、3歳頃のように必ずしも親との接触を必要としなくなってくる。さらに発達が進んで5～6歳頃になると、自己主張よりも自己抑制の能力が上回るようになり、ある行為や事柄が、今までのように大人が「いけない」というから「悪い」のではなくて、自分なりに考えて納得のいく理由で物事の判断ができる基礎が培われてくる。また、日常生活上の基本的な習慣が身に付き、ほとんどのことを自分自身でできるようになる。

このような発達上の重要な時期に、最も身近でその発達を見守る親が、子どもの発達段階を踏まえた上で上手に愛情表現をすることは、子どもが健やかに成長することを助けると考えられ、そのための手段として、親からの十分な身体接触、特に「抱きしめ」が重要な役割を果たすと考えられる。しかしながら、現代の親による子の養育において、抱きしめを始めとする身体接触はあまり多くはないと考えられており、茂木 (2003) は、母親から子への身体接触は、年少期から年中期の間に顕著に減少することを指摘している。

そこで本研究においては、抱きしめを含む日常的な身体接触の程度が、子どもの年齢によって異なるのかどうかを調査し、3歳から5歳の幼稚園児を持つ親が、子どもを抱きしめるという行為を実験的に繰り返すことで、子どもに対するイメージに変化が見られるかどうかを検証することを目的とする。

2. 研究方法

調査対象者

調査対象者は、広島大学教育学部附属幼稚園の年長組に属する33名 (男児14名, 女児19名)、年中組に属

する35名（男児18名，女児17名），年少組に属する20名（男児10名，女児10名）および，その保護者であった。本研究では，父親と母親の比較と男児と女児の比較，児の年齢による比較がそれぞれ可能となるように各クラスの園児を，父親抱きしめ群（年長組17名〔男児7名，女児10名〕，年中組18名〔男児10名，女児8名〕，年少組10名〔男児5名，女児5名〕）と女児抱きしめ群（年長組16名〔男児7名，女児9名〕，年中組17名〔男児10名，女児7名〕，年少組10名〔男児4名，女児6名〕）に分割して協力を依頼した。

研究の手続き

本研究の手続きについては，前報（今川ら，2007）に従った。以下が本研究の手続きの概要である。

- 1) 日常場面における子どもへの世話行動・共行動の現況と身体接触に関する質問紙調査
- 2) 対児感情評定尺度の実施
- 3) 抱きしめ実施実験

ただし1)については，前報の質問項目を再検討し，一部修正したものを使用した。また2)については，子どもに対するイメージの安定性を検証するために，抱きしめ実施実験の前後2回の調査に加えて，抱きしめ実施実験の1ヵ月後に再度同じ質問紙調査を実施した。

調査の日程

質問紙調査と第1回目の対児感情評定尺度による調査は，2008年9月9日に配布し，9月16日に回収した。抱きしめ実施実験を9月20日から9月29日の10日間にわたって行った後，9月30日に第2回目の対児感情評定尺度調査票を配布し，10月6日に回収した。12月8日に第3回目の対児感情評定尺度票を配布し，12月16日に回収した。

3. 結果と考察

本報告では，調査対象者全88名（父親45名，母親43名）のうち，3回にわたる対児感情評定尺度調査に全て協力していただき，かつ抱きしめ実験にも参加して下さった調査対象者52名（年長組の父親8名，母親8名，年中組の父親10名，母親9名，年少組の父親8名，母親9名）のみを分析対象とした。

1) 抱きしめの実施状況

各組の父親と母親の抱きしめ実施結果を，それぞれ図1と図2，および図3に示す。子どもの抱きしめを依頼した10日間について，多くの父親と母親が毎日抱きしめができたか，ほとんど毎日抱きしめができたと回答し，対象者が積極的に実験に協力して下さったことを示している。

2) 抱きしめによる対児感情の変化

図4に10日間の抱きしめ実施前後とその1ヵ月後に

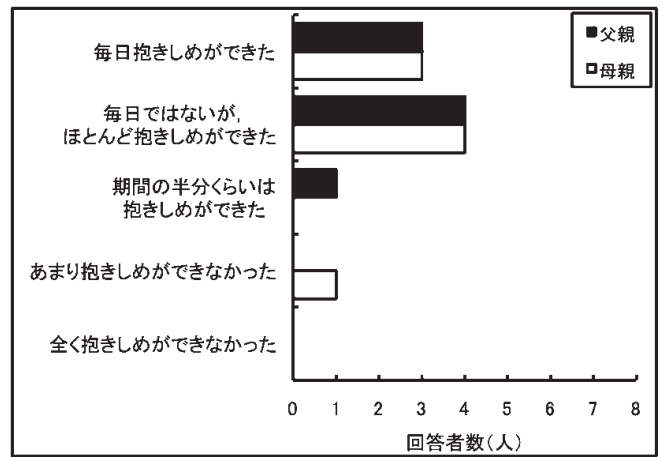


図1 年長組の父親と母親の抱きしめ参加状況

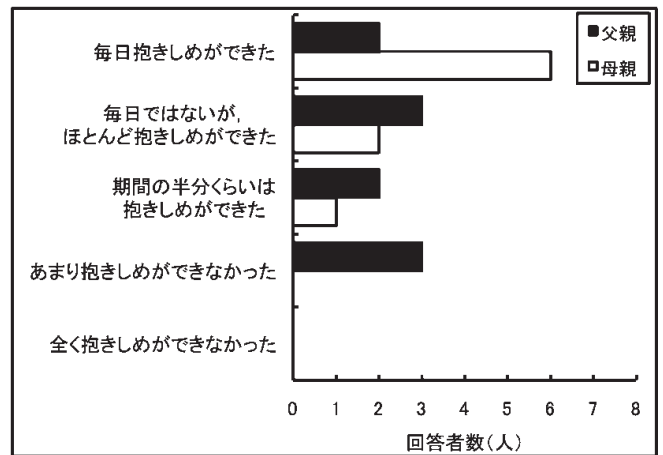


図2 年中組の父親と母親の抱きしめ参加状況

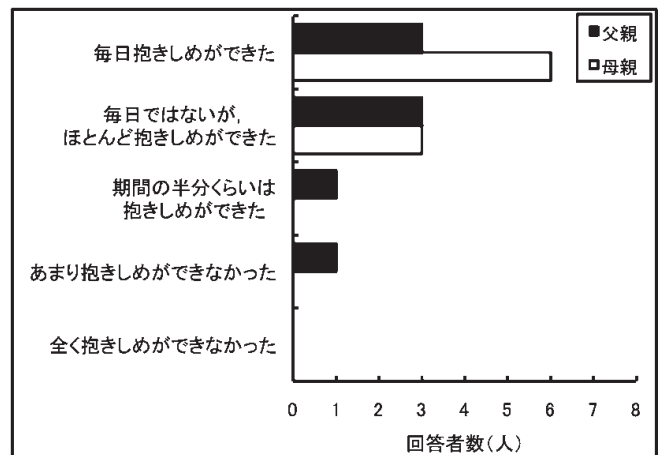


図3 年少組の父親と母親の抱きしめ参加状況

における，年長組の父母の対児感情の変化を示す。10日間の抱きしめによって，父親の児に対する接近得点には上昇が見られ，回避得点には低下が見られた。また，1ヵ月後の接近得点は抱きしめ前とほぼ同レベルに戻っていたが，回避得点は抱きしめ後よりさらに低下していた。

母親の児に対する回避得点には低下が見られた一方で，接近得点にも若干の低下が見られた。1ヵ月後の

接近得点は、抱きしめ前とほぼ同レベルに戻り、回避得点は抱きしめ前よりも上昇していた。また、抱きしめ実験1ヵ月後の母親の回避得点を除けば、母親の児に対する接近得点と回避得点はいずれの時点においても、父親と比較して小さい傾向があった。

図5に10日間の抱きしめ実施実験前後とその1ヵ月後における、年中組の父母の対児感情の変化を示す。10日間の抱きしめによって、父親の児に対する接近得点には上昇が見られ、回避得点には低下が見られた。この傾向は、1ヵ月後においても引き続いて認められた。

母親においても父親と同様に、児に対する接近得点の上昇と回避得点の低下が見られた。しかし、1ヵ月後には接近得点と回避得点のいずれもが、抱きしめ前とほぼ同レベルに戻っていた。また、年長組の母親と同様に、抱きしめ実験1ヵ月後の児に対する回避得点を除けば、児に対する接近得点と回避得点は、いずれの時点においても父親と比較して小さい傾向があった。

図6に10日間の抱きしめ実施実験前後とその1ヵ月後における、年少組の父母の対児感情の変化を示す。10日間の抱きしめによって、父親の児に対する回避得点には低下が見られたが、接近得点には顕著な変化は

見られなかった。1ヵ月後の児に対する感情得点は、接近得点と回避得点のいずれも、抱きしめ後の感情得点を維持していた。

母親の児に対する回避得点には低下が見られた一方で、接近得点にも若干の低下が見られた。また、年少組の母親の児に対する接近得点は、全てのクラスの父親と母親の中で最も高かった。1ヵ月後の児に対する母親の感情得点は、接近得点と回避得点のいずれも、抱きしめ前の得点とほぼ同レベルであった。

3) 父母個別の抱きしめによる対児感情の変化

10日間の抱きしめによって、抱きしめ後に接近得点の上昇が見られ、かつ回避得点の低下が見られた、すなわち実験の効果が望ましい方向に現れたのは、年中組の父母のみであった。そこで、年中組の父親における個別の変化を詳細に検討するために、抱きしめ実施実験前後と1ヵ月後における対児感情得点を、対象者別に図7と図8に示す。同様に、母親の対児感情の変化を、対象者別に図9と図10に示す。

図7から、10名中5名の父親において、抱きしめ後に接近得点の上昇が見られた。2名の父親は抱きしめ前後に顕著な変化は見られなかったが、例えば女兒F

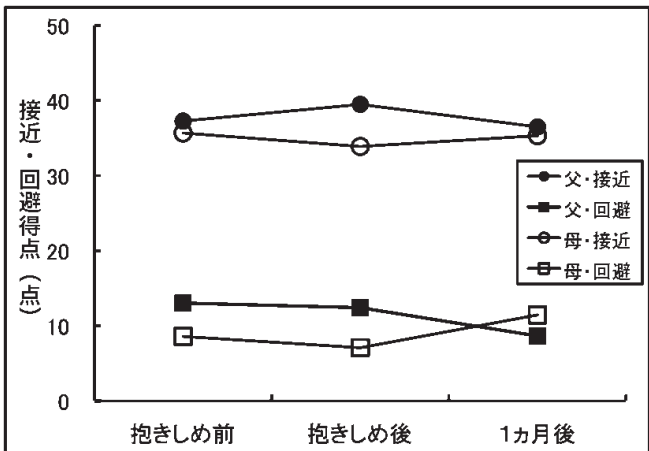


図4 年長組の父母における接近・回避得点の変化

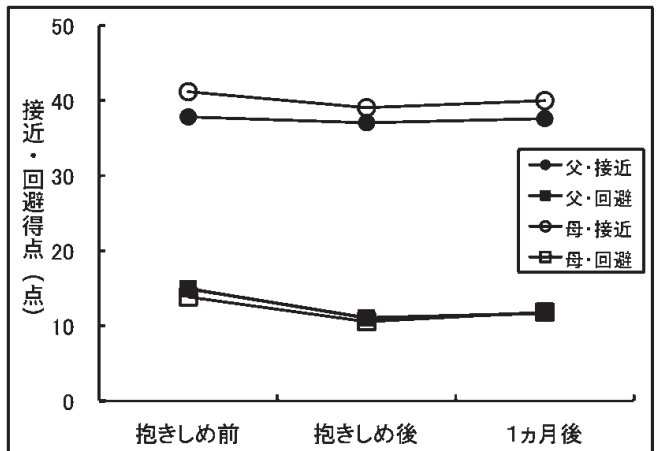


図6 年少組における父母の接近・回避得点の変化

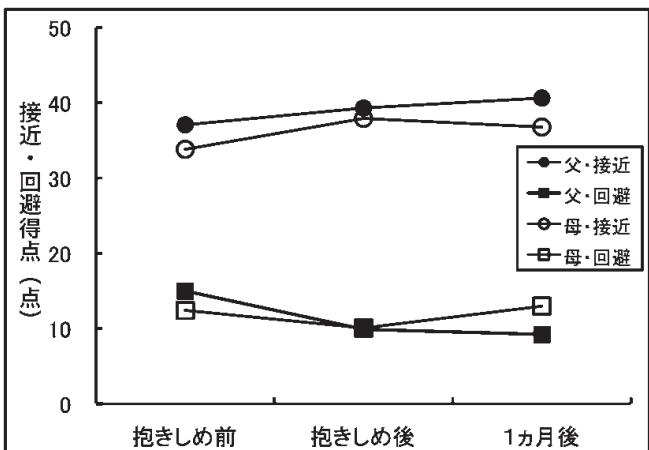


図5 年中組の父母における接近・回避得点の変化

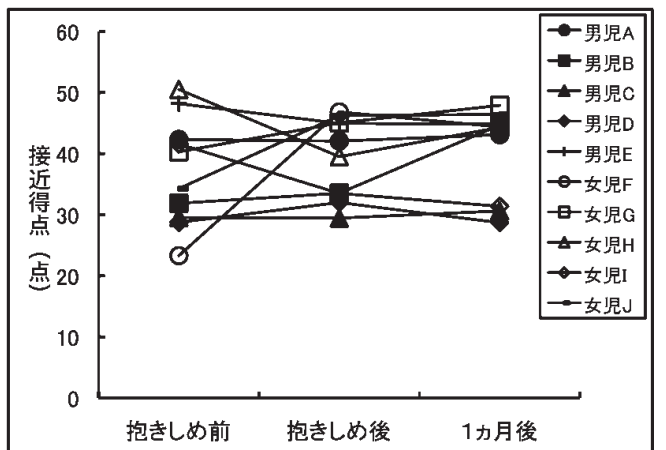


図7 年中組の父親個別の接近得点の変化

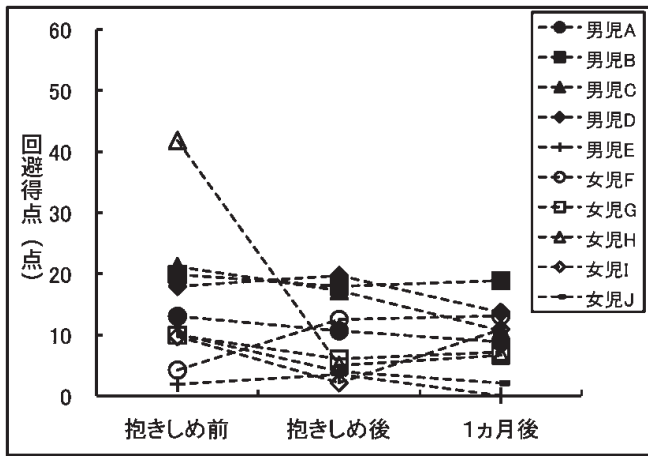


図8 年中組の父親個別の回避得点の変化

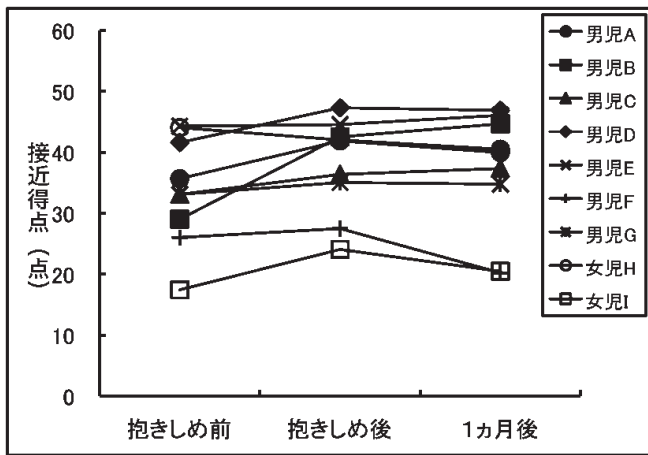


図9 年中組の母親個別の接近得点の変化

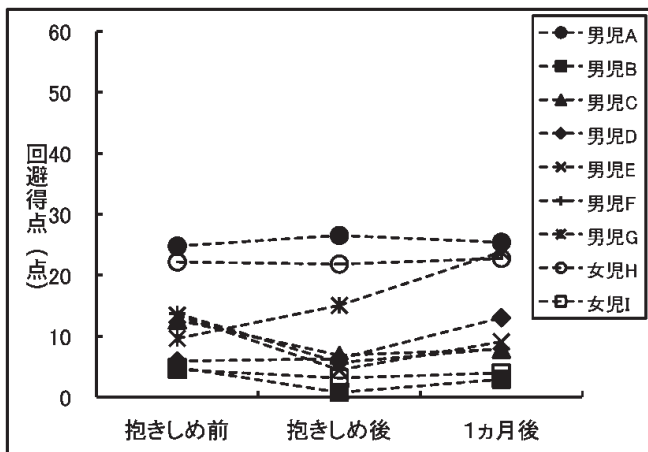


図10 年中組の母親個別の回避得点の変化

や女児Jの父親のように、抱きしめによって児への接近得点が顕著に上昇したものも見られた。他方、回避得点については、10名中7名の父親において、抱きしめ後に得点の低下が見られた。中でも女児Hの父親の回避得点の低下は顕著であった。

年中組の母親については、9名中8名の母親において抱きしめ後に接近得点の上昇が見られ、回避得点については、9名中7名の母親において、抱きしめ後に

低下していた。しかしながら、父親において見られたような、接近あるいは回避得点の顕著な変化を示した母親は見られなかった。

4) 児の年齢別の抱きしめによる対児感情の変化

各年齢クラスの男児の父親における抱きしめ実施実験前後、および1ヵ月後における対児感情の変化を図11に、女児の父親の対児感情の変化を図12に示す。

男児の父親の児に対する接近・回避得点と、女児の父親のそれを示した図11と図12を比較すると、男児の父親の抱きしめ前における接近得点は、年長の児ほど低く、女児の父親の抱きしめ前における接近得点は、年長の児ほど高い傾向があった。それとは逆に、男児の父親の抱きしめ前の回避得点は年長の児ほど高く、女児の父親の抱きしめ前の回避得点は、年長の児ほど低い傾向があった。つまり、父親にとって男児は、年齢の小さい方が、より肯定的に感じられる存在であり、逆に女児は、年齢の大きい方が、より肯定的に感じられる存在であることが伺われる。父親が児を抱きしめることで、男児の父親の否定的な感情の年齢による差は小さくなる一方で、女児の父親については、子どもの年齢による肯定的な感情の差が大きくなる傾向が見

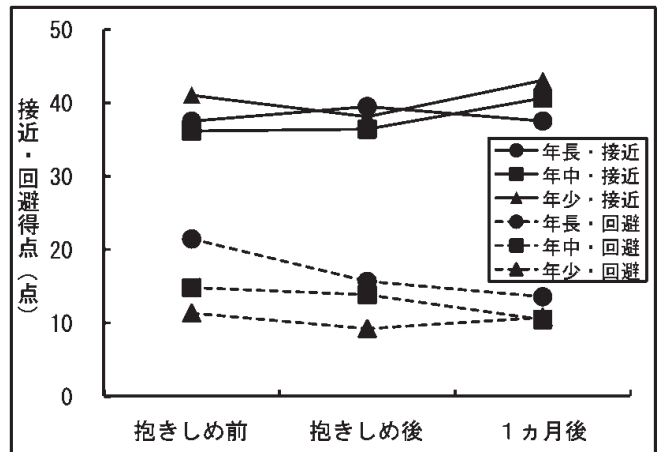


図11 男児の父親の接近・回避得点の児年齢別比較

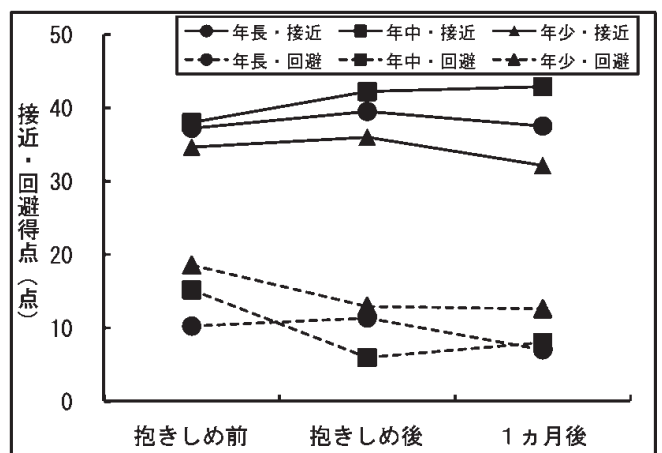


図12 女児の父親の接近・回避得点の児年齢別比較

られた。

各年齢クラスの男児の母親における抱きしめ実施実験前後、および1ヵ月後における対児感情の変化を図13に、女兒の父親の対児感情の変化を図14に示す。

男児の母親の児に対する接近・回避得点と、女兒の母親のそれを示した図13と図14を比較すると、男児の母親の抱きしめ前における接近得点と回避得点は、年長の児ほど低い傾向があった。抱きしめを行うことにより、年長と年少の男児の母親は接近得点と回避得点の両方を低下させた一方で、年中の男児の母親のみが抱きしめによって児への接近得点を上昇させた。

他方、女兒の母親の抱きしめ前における接近得点と回避得点の現れ方にも、年中の児の母親に特徴が認められる。年中の女兒の母親の抱きしめ前における接近得点は、他の2群と比較して低かったが、それに対して回避得点は他の2群よりも高かった。年中女兒の母親の、児に対する接近傾向と回避傾向の相克度を表す拮抗指数は、抱きしめ前後と1ヵ月後のいずれにおいても最も高い値を示した(本報告未掲載)。

5) 日常的に抱きしめを行わない父母の対児感情の変化
抱きしめ実施実験前に行った、子どもへの日常的な

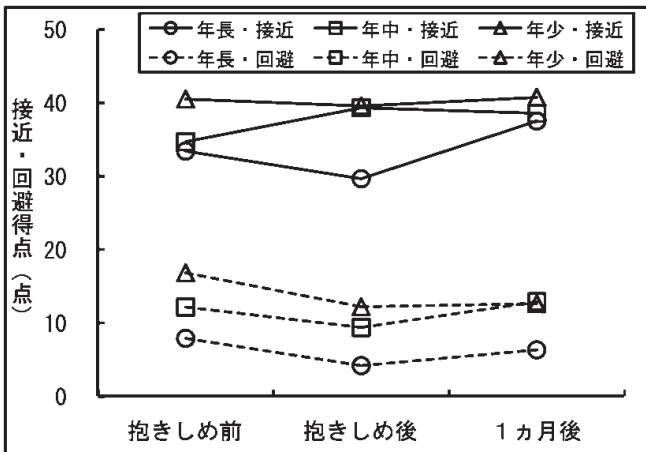


図13 男児の母親の接近・回避得点の児年齢別比較

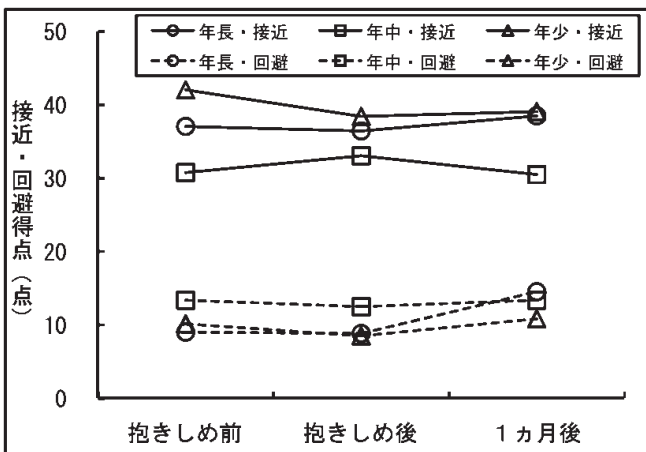


図14 女兒の母親の接近・回避得点の児年齢別比較

身体接触に関する質問紙調査で、1ヵ月間の児に対する抱きしめの頻度が「全くしなかった」、あるいは「数回した」と回答した父親および母親で、抱きしめ実施実験に参加して下さった対象者11名(父親8名、母親3名)の対児感情の変化を、図15に示す。

図15から、日常的に抱きしめを行っていない父親と母親が児を抱きしめることで、児に対する接近得点は上昇し、回避得点は低下する変化が認められた。

次に、日常的に抱きしめを行っていないと回答した父親と母親個別の、抱きしめ実施実験前後、および1ヵ月後における対児感情の変化を図16と図17に示す。

図16に示すように、接近得点については、11名中8名の父親と母親で、抱きしめ後に得点の上昇が見られ、図17に示すように、回避得点については、11名中9名の父親と母親で、抱きしめ後に得点の減少が見られた。

まとめ

年中組の父親と母親に、抱きしめの効果と推量される接近得点の上昇と回避得点の低下が見られた。4歳

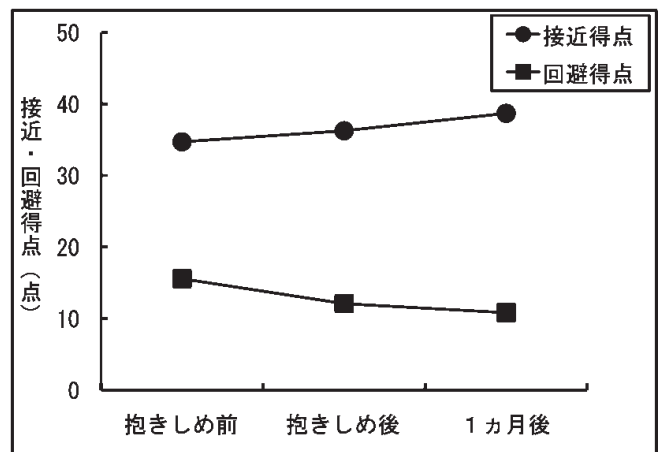


図15 日常的に抱きしめを行わない父母の接近・回避得点の変化

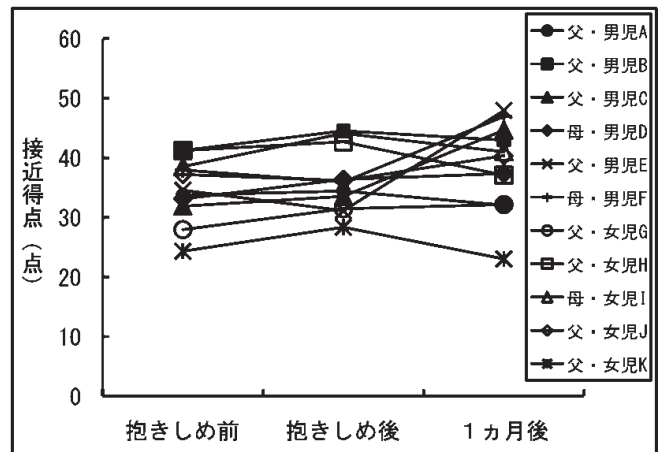


図16 日常的に抱きしめを行わない父母個別の接近得点の変化

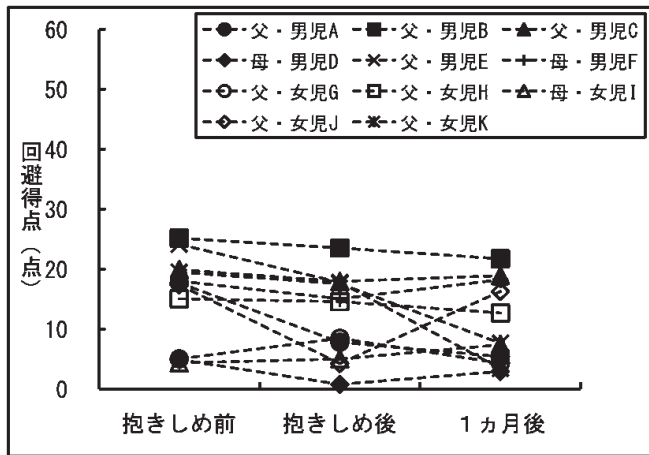


図17 日常的に抱きしめを行わない父母個別の回避得点の変化

頃は、児の自己主張が幼児期において最も高まるが、自己抑制が十分に発達していないために仲間やきょうだいとのケンカが多く見られる(柏木, 1983)。しかし友だちと一緒に遊ぶことを知り始めるため、3歳頃までのように、親に対する接近や身体接触を必要としなくなり、母親から子への身体接触が、年少期から年中中期の間に顕著に減少することを茂木(2003)も指摘している。子どもとの関係に揺らぎが現れるそのような時期であるがゆえに、実験的な抱きしめによって、年中組の父親と母親に、児に対する肯定的な感情得点と否定的な感情得点における望ましい変化が見られたのかもしれない。

また、4歳児の母親の娘に対する肯定的な感情得点は、他の母親や父親と比較して低く、肯定的な感情得点と否定的な感情得点の差が小さかった。そのため、4歳児の娘の母親の娘に対する拮抗指数は、他群の親に比べて大きかった。これは、前述のように4歳という年齢が難しい年齢であることに加えて、一般的に母親は、娘に比べて男児に対する偏好性を持っている(今川ら, 2007)ことにも原因があるのかもしれない。ただしこの点については、更なる追究が必要と考える。

日常的にあまり抱きしめを行っていない父親と母親は、抱きしめを経験することで、児に対する肯定的な感情得点を上昇させ、否定的な感情得点を低下させる傾向が見られた。さらに、結果には示さなかったものの、抱きしめ後には拮抗指数も低下していた。父親と母親の個別の変化を見ても、多くの父親と母親が、抱きしめによって児への肯定的な感情得点を上昇させ、否定的な感情得点を低下させていおり、1ヵ月後にお

いても、その傾向を維持し続けていた。

親が児を抱きしめるという行為は、本来ならば、親から児へ自発的に行うべきものであり、他人から強制されて行うものではない。本研究における実験的手続きのように、親が半ば強制的に児への抱きしめを行った場合、親の児に対する肯定的な感情得点を低下させたり、否定的な感情得点を上昇させたりする危険性があることは、留意すべき課題であろう。しかしながら、本研究で示したように、指示されて行う抱きしめであっても、日常的にあまり抱きしめを行っていない父親と母親にとっては、児を抱きしめるという行為によって、児への肯定的な感情を高めることが可能であると思われる。これは、抱きしめるという行為が、親子の物理的な距離だけでなく、心理的な距離をも縮めたことがもたらした結果であると考えられないだろうか。つまり、児を抱きしめることが、親の児に対する感情にプラスに働くのか、あるいはマイナスに働くのは別として、親が児を抱きしめるという行為は、愛情表現としての行為であるだけでなく、親にとって児を理解するための手段のひとつであると言えるのではないかとと思われるのである。

引用文献

- 1) Ainsworth, S. (1983). アタッチメント：情緒と対人関係の発達(依田 明, 訳). 東京：金子書房. (Ainsworth, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.)
- 2) Green, E. H. (1993). Friendships and quarrels among preschool children, *Child Development*, 4: 237-252.
- 3) 今川真治・山元隆春・財満由美子・林よし恵・三宅瑞穂・落合さゆり. (2007). 「抱きしめる」ことが親の子に対するイメージと子どもの行動に与える影響に関する研究(1). *広島大学 学部・附属学校 共同研究機構研究紀要*, 36: 415-423.
- 4) 柏木恵子. (1983). 子どもの「自己」の発達. 東京：東京大学出版会.
- 5) 茂木寿美子. (2003). 幼児期における身体接触と自立の時期的区分. *日本保育学会大会研究論文集*, 56: 192-193.
- 6) 無藤 隆. (1997). 共同するからだごとことば—幼児の相互作用の質的分析. 東京：金子書房.